



我妻榮記念館

だより

母校創立80周年（昭和41年）の記念講演で、生徒たちに「人間には大器晩成型と、気の利いた化学肥料のような長続きしない型とがあるという事です。……駄目になるような肥料ばかりやっていると、土質がどんどん悪くなる。堆肥というのは、すぐには効かないが、2年3年とやっているうちに、土質を改良することさえやりかねない。人間も、この堆肥型でなければならぬ」と、語りかけた我妻榮先生。

創刊号

発行日/2000年3月31日

発行/我妻榮記念館事務局

☎992-0045

米沢市中央3-4-38

TEL 0238-24-2211



発刊に際して

我妻榮記念館館長

松野良寅

歴史・教育・文化——これは、城下町米沢を表象するキーワードです。

しかし、藩祖謙信公以来の歴史や、鷹山公の藩制時代から近・現代までつづく教育の伝統については、市民一般にも相応の認識があるようですが、その《文化》の根底にある米沢の精神風上の認識という点になると、いささか疑問に思われる節があるような気がします。

辞書的な定義では、①「社会を構成する人々により習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体」②「学問・芸術・宗教・道徳など、主として精神活動から生み出されたもの」（『大辞林』）となるでしょうが、文化という概念は、歴史や教育のように具体性がなく、ピンと来ない恨みがあります。

この《文化》という言葉がもつ抽象的なイメージをより具体的に理解する方法はないものでしょうか。——あります。我々の身近な先人たちの足跡をたどり、その性格、勉学、言行、思想の在り方を調べて見れば、そこには必ず「米沢の精神風土」に根ざす何かを発見することが出来ます。それが「米

沢の文化」と言ってもいいでしょう。その土地の文化は、自然環境ばかりでなくそこに住む人達の生活の知恵の累積が作り出すものです。《質素》《勤勉》《謙譲》《敬師》《律義》——いずれも先祖代々受けついできた米沢人の美質であり文化の特異性の根源となるものです。

ところで、我妻榮記念館創設以来早八年の歳月が流れました。

あらためて我妻先生の足跡・功業を振り返ってみると、その言行や日常生活の端々に、不思議にも米沢の歴史・教育・文化の影響が影濃く投影されていることに気がされます。一見、不世出の天才が尊卑のごとく現れ、米沢などとは無縁の、天下の碩学としての業績面にとかく目が向きがちですが、先生の心情はいつも米沢から離れず、冷しる・柿の胡桃合え・打ち豆・鯉のあらひ等々、生涯、ふるさとの味を忘れることができなかったようですね。先生には米沢の文化が染みついていた、と言ってもいいでしょう。

過半生を東京で過ごされた我妻先生にとって、ふるさと米沢は、「遠きに在りて想う」所ではなかったようです。研究意欲は絶え

米沢有為会で購入・平成4年オープン

開館までの経過



我妻榮記念館は、我妻先生の生家で、築年は定かでないが明治末期の頃と思われる。米沢におけるごく標準的な二階建てで、床面積二五・五坪、急な階段を登った二階の六畳間が先生の勉強部屋であった。母屋の南東部に接続して二階仕切りの二坪の上蔵があり、資料室としている。

大正六年の大火の折、米沢中学の生徒達の懸命な防火活動により、類焼を免れたことはエピソードとして語り継がれている。この建物は、大正七年、我妻家から大友家が買い受け、爾米昭和の末期までの七〇年間を経た時点で、市内の建設会社の手に移り、老朽建造物でもあるところから解体の命運にさしかかっていた。そうした情報が洩れ伝わると、市内の一部有志の間に、我妻先生の偉業顕彰の意味からも、その生家を保存継承したいという強い願いが湧きあがった。

平成元年、米沢市制施行と社団法人米沢有為会創立が共に百年という節目に際し、米沢有為会の本部東京では、一千万円を募金して奨学基金の充実に東京興業館の宮修繕を主とした記念事業を計画していた。その時、有為会米沢支部から我妻先生の生家を取得保存する事業も、本部計画の事業に組み込まれていた。このことを受けた本部では、取得にかかわる募金活動一切を米沢支部中心に進

めることを条件に、この提案を承認した。高橋幸翁米沢支部長（市長）はじめ支部役員は、これを了とし、各方面の代表者を招集、協議を重ね、川野希氏（米沢副支部長）を実行委員長として事業は展開された。この事業の募金目標額は四千万円で、内訳は土地一六〇坪並びに建物の取得費三千万円、建物の修復費等一千万円、合計四千万円となった。この頃、世の景気も冷え込み期に入っていて難儀なことではあったが、文化勲章に輝き、各界市民でもあらわれる我妻先生へ寄せる各方面からの思いは厚く、平成三年の前半までの約二年間で、目標額達成の見通しがついた。結果的には法人六九件で約二千万円、個人二八六件で約六百万円、残り一千万円は米沢市からの補助金となった。このような経過を経て取得に漕ぎ着けることができたのである。その後一応の補修も完了して、平成四年六月十九日の日曜日、雨降るなか米沢有為会定例総会の佳日に「我妻榮記念館」としてオープンしたのである。

我妻 榮先生を偲ぶ夕べ



生誕百年祭の折（平成九年十月）

（前ページに続く）

ず民法学の大成に向けられていたが、心はいつも吾妻の峰を越えて、故郷の米沢へと向いていました。先生の「望郷の念」はいつとはなく「愛郷の心」へと昇華し、米沢人の美質を、地道にしかも明るく、心の中で醸成して来られたように思われます。

我妻榮記念館は、いわゆる（記念館）のイメージからは程遠い、寂しい質素な施設ではありますが、我妻先生の謙譲の美徳を象徴する記念碑でもあります。

そこで、我妻先生はじめ郷土の先人たちの顕彰する拠点にあふさわしい、ささやかな記念館事業の一端として、市民一般に郷土の歴史・教育・文化に対する理解を深めて戴くこと、「我妻榮記念館だより」を発刊することにしました。

つきましては、炉辺談話の種になりそうな、郷土の先人に関する情報や写真、書画等をお寄せ戴ければ幸甚に存じます。

我妻榮児童文化賞

米沢児童文化協会（高森務会長）では、平成六年から市内の小・中学生を対象に、文化的分野で優れた活動をした個人・団体に我妻栄児童文化賞を贈る事業をしています。

これは、我妻先生が生前、米沢子ども新聞に寄せられた浄財を基金としてはじめられたもの。七回目にあたる平成十二年も二月二十六日に表彰式が行われました。



生誕百年祭特別展を市民ギャラリーで。左から我妻義・愛子夫妻、我妻字氏（義氏長男）、唄 孝一氏（東京国立大学名誉教授）

我妻榮先生略年譜

1897年	0歳	4月1日	米沢市鉄砲原町(現我妻榮記念館)で父又次郎、母つるの長男として生まれる。
1903年	6歳	4月	興譲小学校入学
1909年	12歳	4月	米沢中学校入学
1914年	17歳	3月	米沢中学校卒業
		9月	第一高等学校一部内種首席合格
1917年	20歳	6月	第一高等学校卒業
		7月	東京帝国大学法学部入学
1919年	22歳	1月	高等文官試験行政科合格
1920年	23歳	7月	東京帝大法学部法律学科独逸法兼修卒業
1922年	25歳	7月	東京帝大助教授
1923年	26歳	6月	文部省留学生として民法研究のため欧米留学
1925年	28歳	12月8日	帰国
1926年	29歳		鈴木緑と結婚
1930年	33歳		左足首の関節炎を患いギブス着用
1945年	48歳		東京帝大法学部学部長
1946年	49歳		貴族院議員、臨時法制調査会・司法法制審議会・家事審判制度調査委員会各委員
1948年	51歳		日本私法学会理事長
1956年	59歳	7月	法務省特別顧問
1957年	60歳	3月	東京帝大定年退官、同大学名誉教授
1964年	67歳		文化勲章、米沢市名誉市民
1966年	69歳		母校に私財を寄贈し「財団法人白頼英学財団」を設立
1970年	73歳		母校興譲小学校に「まがき文庫」設立
1973年	76歳	9月	興譲館創立記念式典・我妻先生胸像除幕式・同窓会総会に出席
		10月21日	急性胆のう炎のため死亡
			勲一等旭日大綬章



資料室の整理には、東京の唄 孝一氏（東京都立大学名誉教授）と藤巻和弘氏（日本医師会勤務）の両氏に鋭意当たっていただきました。

平成四年六月十九日、記念館オープン。



先人顕彰会の主催で隔月の第1日曜の朝7時から「火種塾」が開催されます。地元講師が、主に先人の偉業を紹介するもので、毎回大入りです。

我妻榮記念館出版図書

- 1、我妻榮先生講演集 一、〇〇〇円
- 2、ふるさと人物探訪 親と子の郷土史 一、〇〇〇円
- 3、我妻榮先生 二〇〇円
- 4、伊藤忠太先生 二〇〇円
- 5、高橋里美先生 二〇〇円
- 6、素顔の先人たち 一、五〇〇円
- 7、海軍王国の誕生 一、八〇〇円
- 8、我妻 榮一人と時代 我妻榮先生生誕百年記念誌 四、〇〇〇円
- 9、自雷子物語 我妻榮先生に学ぶ 五〇〇円
- 10、春宵よもやま話 郷土史の散歩道 五〇〇円

先人顕彰会も記念館内に

これまで米沢酒造組合内にあった上杉鷹山公と郷土の先人を顕彰する会の事務局が、四月一日から我妻榮記念館内に移ります。

事務職員石沢きよ子さんは、毎週火・金曜日につめております。

ふるさと

東京のような大都市に生まれ育つたものにとって、ふるさとが存在しない可能性が高い。私の場合には東京でも田舎といわれた石神井に生まれ育つたので、家の前に広がる田圃でイナゴを捕ったり、庭に植えてある柿やぐみの木の実を採って食べる、或いは蝶や蜂等の昆虫を探すなど自然と親しむ機会が多かった。しかし戦後の都市化の波によって、町はずっかり様変わりし数年前に両親の墓参の途中で昔住んでいた家の近くに寄ってみたが、全く別な町並に変化してしまい、今では私にとってふるさととは、記憶の中しか存在しないものになってしまっている。

その点で父は米澤というふるさとを心の中に持ち続け、生前にしばしば訪れて昔の恩師や友人、知人に会うことが出来、没後も自分の生家を記念館にして頂いたのであるから、本当に幸せ者であると思ふ。

父は生活の場を東京に定め、墓まで石神井の三室寺に移してからもふるさと、米澤のことを何かにつけて懐かしく思い出していたと思われる。その為には幼少の頃から、折に触れて米澤の話を父から聞かされて育つた。

板谷峠のスイッチバックは勾配が急で、昔は石炭を焚く蒸気機関車だったからトンネルの中の煙が

もの凄くて、機関士が気絶して汽車が坂道を逆戻りしたエピソードなどは、子供心に印象強く残っている。小学生の時に初めて、年末に父の学友の故遠藤俊助氏（托氏の御尊父）が経営していた駅前の石炭屋（金津屋）さんにお邪魔した時には、トンネルに入る度に煙を吸い込んで、父の話を実感として味わったのも今では楽しい思い出になっている。

幼い頃に身体が弱かった父を連れて祖父、又次郎（恩雷様）が白布の高湯に湯治に行く時には途中までは馬に荷を積むが、山道が険しくなる最後は牛に積む、牛の方



名誉館長

我妻 堯

が馬より強いからだ良く聞かされた。最近、案内して頂いた時には、自動車であつたという間に着いてしまったので、牛がどこで苦労したのかを確かめることも出来なかつたが、現在の記念館は父が若い頃に住んでいた家で、当時祖父が教えていた米澤中学で勉強していた中学生を、祖母（つる）が家に預かって父と一緒に勉強を教えたという話も良く聞かされたが、あまり広くもない家で若い学生を世話するのはさぞかし大変だったろうと思われる。私が物心ついた頃の祖父は、既に軽い脳卒中（恐ら

く脳梗塞）を経験していた為か、大変に穏やかな老人で、中学生から児雷様と恐れられた面影はなかつた。孫である私と祖父との会話もあまりなかつたので、中学校の教師時代の思い出を聞かされた記憶がなく、その点では残念に思う。祖母も私が生まれた年の暮れに故人となつたので当然のことながら記憶がない。父は上京してからは東大法学部で恩師の鳩山秀夫教授に公私ともにお世話になつたが、鳩山先生は当時から非常にハイカラで西洋式の生活を好まれ、父はその生活にいわゆるカルチャーショックを受けたらしい。

若い頃に米澤で田舎暮らしをしていた父はその後の米國とドイツへの留学中に更に当時の西洋の近代的生活に大きな影響を受けたと思われる。

母は結婚前にバリの駐フランス外交官の家に世話になつて家事見習いをしていたという当時としては珍しい経歴の持ち主で、帰国の船中で父と知り合つて結婚したという話は良く知られている。私は当時の父の西洋文明へのあこがれが、母との結婚で終結を遂げたと思ふ。母は食生活もかなり洋風で

あつたらしく、母が腕を振るつたフランス料理などが今でも我妻家のメニューに残っている。しかも、年を重ねると油濃い西洋料理よりもさっぱりした日本料理を好むようになるのが日本人の食生活の優れたところで、父も多分にその傾向があつた。本来、魚が好きでもあつたし、祖父にしこまれた釣りの楽しみは夏休みに軽井沢の池や川で続けることが出来た。自分で釣った鮎を串に刺して囲炉裏（別荘に暖炉の形で作らせた）の炭火の周りで乾燥させてから、甘露煮にしたたり、鯉（釣るよりも土地の鯉屋から購入）を自分で料理して洗いや甘煮を作るのが、原稿書きの暇を見ての楽しみであつた。それを眺めていた私もおかげで魚料理ばかりではなく、冷や汁、凍み豆腐、打ち豆なども幼い頃に食べた記憶がある。当時の石神井は都心よりも温度が低かつたから、冬になると豆腐を外に出して凍らせて作つたが、戦後電気冷蔵庫が普及すると、わざわざ冷凍室で凍み豆腐を作つたのは我が家くらいかも知れない。記念館をつくって頂いたのがきっかけとなり、私も米澤にうかがう機会が増え、今では身体半分ふるさとだと思つている。父が生前よく言っていた東北人の粘り強く、ひとつの事を何時までもやり続ける性格は私にも遺伝したようである。これからも米澤の人々にお会いして、その美点を身につけていきたいと思つている。

我妻榮記念館の開館日

原則として
毎週火・木・金曜日
午前10時～午後4時
TEL 〇三三八一四二二二一
管理人 神田倉一
(自宅 三三六一八五)

我妻榮記念館運営スタッフ

- ▽名誉館長 我妻 堯（国際厚生事業団参与）
- ▽館長 松野良寅（東北芸術工科大学名誉教授）
- ▽運営委員 佐野清一（佐野水産物代表取締役）
- ▽同 遠藤拓（金津合資会社社長）
- ▽同 今田久夫（元高等学校校長）
- ▽同 川野希（富陽建設代表取締役）
- ▽同 小関薫（家沢上杉文化振興財団常務理事）
- ▽事務局長 小杉基（茨城県教育委員会文化課長、四月一日より鈴木たみ子（同））
- ▽管理人 神田倉一

後記

出そう、出そうと思いつつやつと八年目にして創刊号となりました。年一回程度となりますが、今後も継続してまいります。題字の我妻榮は我妻先生の自書から引用したものです。（K）